

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名

ハス

論 文 題 目

構造主義言語学における「音素」概念の存在論的考察

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	宮原 勇
委員	名古屋大学	教授	田村 均
委員	名古屋大学	教授	金山 弥平
委員	名古屋大学	教授	松澤 和宏

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

序章では、ソシュールの『一般言語学講義』における構造主義的思考の基本的な特徴を分析している。特にそれぞれの言語の<音韻体系>というものは、まさに「有機的全体」を成しており、その構成要素である「音素」は、その体系の内部での相対的な位置によって規定され、その全体自体は、内在する法則に従って構築されているが、この「構造」という概念は、音素からなる音韻体系の分析において要請された考え方であったことを示した。また、第1章では、『一般言語学講義』における言語記号の本質に関するテーゼ、特に言語記号の「恣意性」のテーゼを検討し、第2章「ソシュール『一般言語学講義』における音韻論と音声学」では、本論文の中心的主張であるテーゼ、すなわち、<ソシュールの言語論に関する構造主義的解釈は、ことさらに音声学、ないしはそれをさらに抽象化した学である音韻論での発想を、シーニュ全体に敷衍したものであり、意味論的要素も含めた言語全般に当てはめることは適切ではない>という見解に立ち、『一般言語学講義』における音韻論と音声学の理論を検討している。

第3章「ソシュールの構造論的思考と『価値』概念」では、「差異素」という筆者独自の概念を援用し、シーニュの<同一性>にまつわるソシュールの議論を検討した。そして、二重体、ないしは結合体としてのシーニュ自体の存在論的特性を解明した。

第5章「マルティネにおける『二重分節』と言語の恣意性」では、マルティネによる「二重分節」と言語の「離散性」に関する理論を分析し、第6章「機能主義と構造主義—音声学と音韻論の区別についてのマルティネの見解—」では、さらに、マルティネにおける「音素」の定義を検討した。彼によれば、「音素」とは、<関与特性>の「束」そのものであるという。マルティネの用語では、「関与的特性」と表現されているものは、それは単に音声の「弁別特性」を言っているのではなく、機能面での評価を含んでいるのであり、そこには、既に、音韻論の単位としての「音素」は<機能的な属性の束>へと解体される運命を見て取ることができるとしている。

第7章「『音素』概念の記号論的特異性—ヤーコブソンの『音素の構造について』(1939)の分析」では、ヤーコブソンの「音素」論が検討される。ヤーコブソンの議論の特徴は、後年コミュニケーションに関する独自の記号論として展開される記号論的観点からの「音素」論という点である。音素や音韻論の特徴付けに関して、『一般言語学講義』では、まだ曖昧な点が多かったのだが、ヤーコブソンのこの論文においては、「音素」という言語要素の特徴を明確に定義するに至っている。また、「差異の体系」という概念を、音素の体系以外の言語要素にまで敷衍し、言語体系全体を<弁別的要素からなる体系>と見なす解釈に対しては、ヤーコブソンも批判していることを筆者は指摘している。

第8章「トゥルベツコイの『音韻論の原理』における「音素」の概念とその存在論的位置づけ」においては、トゥルベツコイの「音素」概念を考察し、音素とはいかなる存在論的位置づけがなされているかが、哲学的視点から考察され、最後にはソシュールの「価値」概念が引き合いに出され、ソシュールの<差異の体系>としての言語という、本論文の全体的なビジョンに通ずる観点が出された。それによれば、トゥルベツコイにおいては、ソシュールの言う<対立的、関係的、否定的要素から成立している体系>とは、音韻論的体系にだけ当てはまることが確認された。

最後の第9章「構造主義的思考と現象学的還元」では、<音韻論の研究対象たる音素が、弁別特性から特定される抽象的存在であるのに対して、その音響学的実体を可視化したデータであるフォルマントは、言語認識に対して現象学的還元を行った時の成果の一部に、つまり「現象学的残余」に対応している>という主張が検討され、結局そのような主張は、言語認識にかかわるワーキング・メモリや短期記憶、さらには長期記憶の関与に関する最近の理論を考慮すると、必ずしも妥当であるとは言えず、言語現象に関する研究に於いて、聞き手側での「意識」の分析が必要であるとしたなら、単にフォルマント分析をするだけではだめ

論文審査の結果の要旨

で、人間の意識に関する時間構造を考慮に入れなければならないと結論づけている。

【本論文の評価】

本論文は、ソシュールの講義録を弟子達が編纂した『一般言語学講義』から端を発した、言語学上の構造主義の流れを、「音素」という音韻論上の概念に焦点を当てて辿り、その構造主義的思考の特徴を解明したものとみることができる。特にその解明の際には、音声と音韻の区別、それらと形態素との関連に注目して論じ、最終的には<言語学上の構造主義は、「音素」概念を中心とした音韻論に由来する発想であって、言語現象全般に敷衍することはできない>というテーゼと、<言語音とその聴取を通じての意味理解に関する分析は、人間の予期する能力や記憶という現象の解明が行われな限り不十分であること>を示したものである。具体的には、まずソシュールの『一般言語学講義』の扱いであるが、基本的には弟子達の編纂により改変された部分があり、ソシュール自身の意図がどこにあるかに関しては、草稿等に関する近年の研究を十分に参考にする必要があるが、本論文ではそのような検討がなされていない点は問題である。しかし、本論文の意図から見れば、ヤーコブソンやトゥルベツコイ、マルティネらに対する影響という学説史的観点に限定すれば、博士論文としての価値を減ずるものではないと判断できる。

以上のような前提に立って見ると、まず『一般言語学講義』では明確に概念化されていない「音素」概念の問題点を指摘し、そして『一般言語学講義』での独特な用語である「価値」なる概念を、「差異素」という筆者独自の操作概念を考案して分析し、シニフィアンとシニフィエの関連性とシーニュの存在論的ステータスを可能な限り明確に表現した点は評価できる。

また、マルティネにおける「関与性」概念の検討とトゥルベツコイの「弁別性」概念の分析、さらにはヤーコブソンによる<文字-音素-形態素-意味内容>の重層性に関する記号論的解釈の分析など、構造主義的言語理論の詳細な分析となっていて、全体として言語論、記号論における構造主義的思考の研究として高く評価できる。

また、物理的所与としての音声とは違って、形態素、ないしは意味素という、特定のラング内でのみその「存在」が同定されうる言語要素と絶えず密接に関連している「音素」は、ある意味では抽象的存在であり、筆者の言う「差異素」的な面があるが、しかし、意味や概念といったシニフィエとしての言語の側面は、実際には、単に構造論的、関係論的に捉えることはできないことを示すことに成功している点は評価できる。

また、<周波数分析器によるスペクトログラムのフォルマント自体、「現象学的残余」である>という、スイスの現象学者ホーレンシュタインの主張に対して行った批判は、音声としての言語表現を聞いて理解するというプロセスの分析は、フォルマントだけでは不十分であることを、人間の意識の短期記憶や予期、推論といった時間軸を前後する意識の働きを考慮に入れないと説明できない現象(音素の重複、調音結合、音素修復)を指摘して、行ったものであり、独自性、新奇性という観点から評価できる。

問題点としては、前述したような、ソシュール自身の思想と弟子達が編纂し、かなり改変された現行の『一般言語学講義』の扱いに関する問題点の他に、『一般言語学講義』では「音声学」と「音韻論」といった用語の使用が現代の用法とは逆転しているが、その点に関する議論が未整理のところがあり、わかりにくい点が問題である。とは言え、この点は論文全体の価値を損なう程の瑕疵ではないと判断される。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士(文学)の学位を与えるのにふさわしいものと判断した。